

研究協力者 高石 昌弘 (国立公衆衛生院)

健康診査は単に疾病の発見を目的としたものではなく、ひろく健康状態の把握を目論むという理解が一般的である。とりわけ乳幼児を対象とした健診は、発育、発達という乳幼児の生理的特性から考え、このような理解は当然と思われる。

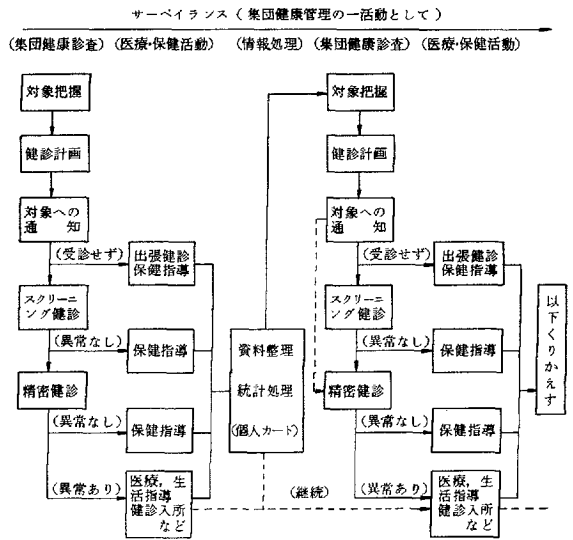
健康の保持増進を目的とした諸活動は、時系列的にみて、決して断面的なものであってはならない。日常生活行動に関する指導を包活した縦断的なものである必要性が大きいといえてよいであろう。このような意味から時系列的な健康管理體系を考えた場合、集団健診というものは、ライフサイクルのなかでのある一定時点において、健康状態を総点検しようとする試みといえることができる。つまり継続的なサーベイランス・システムのなかでの一断面としての役割を果たすものと考えべきであろう。現在の健康管理體系のなかには、サーベイランスの概念があまり一般的なものとしてとりこまれていないが、今後健康状態の常時監視という意味における健康サーベイランスの概念が一般化される必要があるであろう。

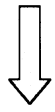
3歳児健診にはじまり、乳児健診の医療機関委託、そして1歳6月児健診に至った乳幼児健診の発展の沿革をみると、ライフサイクルのなかでの特定月齢における健診の回数が増してきている。しかし単に回数を増しただけではなく、特定年月齢における具体的な健診内容に、発達段階の特性を考慮しつつ特徴づけを行っている。このような縦断的にみるサーベイランスシステムのなかで、健診がどのような位置づけにあるかを今後とも十

分に検討してゆくことは必要である。健診と健診との間における医療・保健活動や情報処理をどのように運営するかが、次の健診の効率化を促進する大きな基盤となるからである。

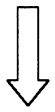
健診の場において身体的疾病の発見される率の低いことを理由に、健診の不必要を説く意見もあるが、上述の健診の意義・位置づけはこれに対する反論となろう。具体的には、健診は健康管理システムの中にあつて意義があるものであり、また保健指導、生活指導にこそむしろ重点をおいて考えられなければならない。

図 乳幼児集団健診の位置づけ (高石)





**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



健康診査は単に疾病の発見を目的としたものではなくひろく健康状態の把握を目論むという理解が一般的である。とりわけ乳幼児を対象とした健診は、発育、発達という乳幼児の生理的特性から考え、このような理解は当然と思われる。